

《研究ノート》

市原市草刈遺跡の方墳群

白井久美子

I はじめに

市原市草刈遺跡の方墳群(註1)は、1979年から1983年にわたって漸次調査され、既に刊行された4篇の報告書(註2)によってその内容が明らかになってきた。台地の西側部分については、未調査であるため全容を知るには至らないが、現在までのデータをもとに若干の私見を加えて2、3の点に注目してみたい。

II 方墳群の構成と群形成

草刈遺跡の方墳群は、平面的な分布から台地の中央部に環状にめぐる群(第1図A・B群)と台地南側の緩斜面に及ぶ群(同C群)に大きく分けられる。環状の群は、さらに一定の方向性をもって配列するA群と不規則に分布するB群に分けられる。A群は、定型化以前の前方後方墳1基を含んで隣接し、周溝の一辺を共有するものも見られる。方墳の形態は、後世の削平を考慮すれば、基本的には周溝が全周する形態で、前方部の発達した前方後方墳の形態(註3)も含めて、佐倉市飯郷作遺跡(註4)の例に極めて近い群構成を示している。

環状の中央空間の解釈には、いくつかの推察が可能であるが、前方後方墳の前方部と、隣接する方墳A3の前面の通路跡が中央空間に面していること、さらにこの中央空間に向って2基、あるいは3基ずつ並ぶ配列が見られることに注目してみたい。この配列は、A群で最も整っていることから、第1図のように北側の谷から中央空間に上ってくる墓道を想定した。また、A群の配列を出土した土器から検討すると、中央から外側へ新しく造られた大きな流れが窺えることも配列の内側を結ぶ道を考える上での傍証となろう。

B群では、この墓道に沿うような配列は見られず、むしろC群に近い分布を示すが、C群との間には明らかな空間がある。この平面分布から、群形成を考えると、まずA群の形成が始まり、B群

を造る過程で新たに分離してC群が営まれたことが想定できる。

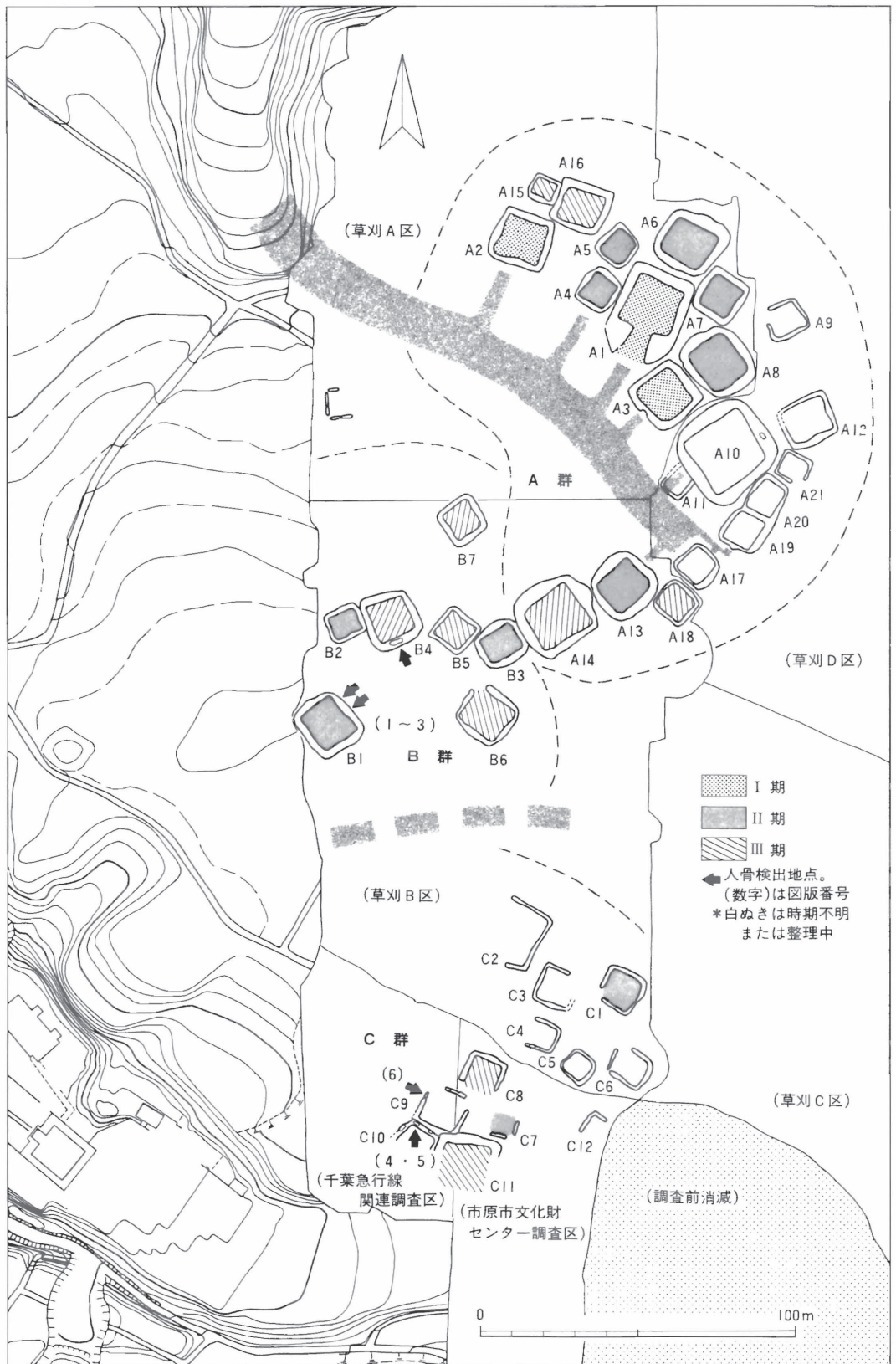
出土した土器群は、ほぼ畿内庄内段階の範囲に位置づけられるが、大きく3段階に分かれており、これによって上記に想定した全体の群構成を3期に分けることが可能である(第2図)。

まず、I期には、A群の墓道幹線部に面したA1・A2・A3が造られ、続いてその背後や幹線部の奥まった所にA4・A5・A6・A7・A8・A13が、B群にB1・B2・B3が造られる。この段階の途中で南側へ分れて占地したC群の造墓が始まっている。最も墳丘規模の大きいA10もこの段階に位置づけられる(註5)ことから、造墓の盛期をII期に求めることが可能である。次のIII期には、A群の外縁部とB・C群へ大勢が移り、主体的な造墓活動がB・C群へ移行した可能性が強い。B群とC群の間に、南西の谷から上ってくる墓道が存在したことも考えられよう。

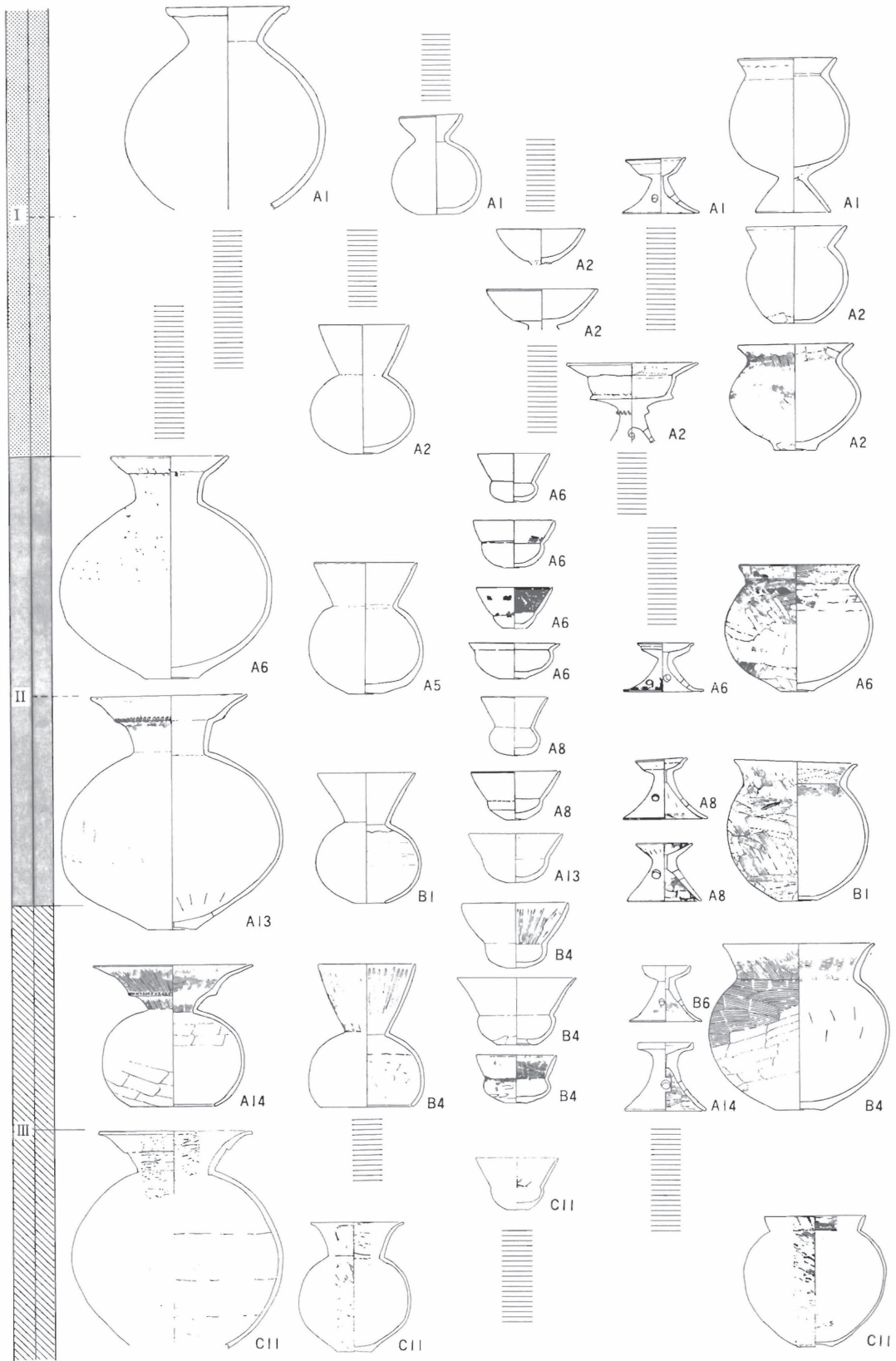
群形成の契機となったのは、特別な形態で他を凌駕する前方後方墳A1で、最も古相の土器群を出土している。これと同世代と考えられるA2・A3はほぼ同規模で、方丘部の面積ではA1と大きな差はない。続いてA群では、2～3基ずつのグループが方向性をもってII～III期にわたって造墓を行っているが、少なくとも2世代が短期間に連続して造墓を行ったことを物語り、墓道の幹線からは8本の枝すじに分かれた分布が見られる。この2世代連続する造墓の流れの中で、II期にはA10、III期にはA14が規模・土器の量共に他を凌いで群の中心的な存在となるが、幹線に面した枝道は8本で終息し、A群の主体的な造墓を終えたものと見られる。

2世代連続する造墓は、一定の方向性を失ったB群にも見られるが、III期にはくずれ、新たに単独の占地をするものが目立つ。

C群は、遺物の遺存が悪いためか時期不明のものも多く、群形成の内容ははっきりしないが、一



第1図 草刈遺跡の方墳群配置図 (1:2000)



第2圖 草刈遺跡 方墳群出土土器

番南に位置するC11が最も新相の土器群を出土していることに着目しておきたい。

III 周溝内埋葬について

草刈遺跡の方墳群で注目されるもう一点の特徴は、縄文時代の貝塚混貝土層中に掘り込まれた周溝内に埋葬された人骨が、かなり良好な状態で遺存していることである。このような混貝土層中の埋葬人骨の検出例は、松戸市河原塚古墳(註6)に、古墳時代中期の墳頂部木棺直葬例もあり(図版7)、貝塚が全国で最も多い房総ならではの偶然性もたらしたものと見えよう。この極めて房総的な特性によって、周溝内に埋葬された人骨がいくつかの歴史的事実を伝えてくれた。

図版1～3は、B1の周溝内の人骨出土状態である。この周溝からは、写真の推定身長160cmの成人女性の他に、成人の大腿骨、若年の歯芽、8歳児の歯芽が検出され、少なくとも4体が埋葬されていることが判明している。すべて北側の周溝から発見されているが、中央の周溝底が深く掘られているものの、明確な掘り込みや土壌はなく、混貝土層中になれば、単なる周溝のみの発掘で終わったであろう。しかし、最も遺存の良い写真の女性は、両手首に計3個(左に2個、右に1個)の管玉を装着して全身を現わした。また、周溝中央の凹部で検出された3体と異なり、周溝底に約15cmのロームブロックをつき固めた上に埋葬されている(図版3)。さらに、土器の出土状況を見ると、この女性の頭と足の部分から器台が各1個ずつ出土した他、中央の人骨出土地点で埴形壺、甕、高坏が出土している。

この発掘資料が、周溝内の埋葬形態、被葬者の性格、副葬品の状況を知る重要な手掛りになることは言うまでもないが、草刈の周溝内埋葬人骨はB1の他に、同じB群のB4で身長132cmの性別不明のもの1体、C群C9とC10(註7)に2体ずつの計4例がある(表1・図版4～6)。この4例に残る成人骨は、伸展葬が基本である。幼児については1例のみであるが、C10内の壺棺(註8)があり、隣りの成人骨が女性と推測されることから親子と考えるのが自然であろう。検出状況は、あたかも母親が壺棺を抱くようでもあり、掘りかたの状況からも同時に葬られたようである。周溝内埋葬者の構成、あるいは性格についてこれだけの資料で

語るの難しいが、B群人骨の形質学的分析では、明らかに成人男子と判明したものがなく、成人女性、若年、小児と判定された点は注目される。

B 1	成人女性1体(身長160cm)、成人大腿骨、若年の歯芽、8歳児の歯芽
B 4	身長132cmの小人(性別不明)1体
C 9	成人1体、他1体 計2体
C 10	成人女性(?)1体、幼児1体

表1 周溝内検出人骨一覧

これらの方墳の墳丘中央部の内部施設は、後世の畑作による墳丘の削平によって既に消滅していると考えられるため、墳丘中央部の内部施設を中心的な埋葬施設とする観点から、これらの被葬者を周溝内被葬者と位置づけることにしたい。

古墳時代の被葬者群は、墳丘中央部の第一義的な被葬者を中心に、墳丘一周溝一周溝外の三群に分けられる。周溝内の被葬者群は、玉類・鉄鏃・刀子などの副葬品をもつことから、周溝外の土壌等に葬られた被葬者とは異なり、墳丘中央部の被葬者に直接関連する被葬者群であるといえよう。特に草刈遺跡例では、女子と子供を主体としており、家族墓の色彩が色濃い。

周溝内埋葬には、上記のような副葬品が見られるが、副葬品は一般に寡少である。古墳時代の出現期・前期では玉類を副葬した例が少なくない。草刈遺跡では、他に草刈六之台遺跡(整理中)で前期の円墳周溝内土壌から管玉4個、滑石製小型勾玉9個が出土している。これは、首飾りになる可能性があるが、B1の手玉の装着例は、ごく少数の玉類の出土を解釈する上で極めて重要である。数個のガラス小玉や土製小玉が周溝内土壌から出土することもあり、これらもB1の管玉同様手玉として用られた例といえよう。

尚、管玉3個を手玉として副葬した例には、市原市小田部古墳がある。

IV おわりに

草刈遺跡の前期方墳群の構成では、小規模な前方後方墳の周囲に連続して営まれる2～3基のグループが、方向性をもって配列する点に着目して群の中央空間に墓道を想定したが、この群構成のあり方は、神奈川県横浜市歳勝土遺跡の弥生時代中期後半の方形周溝墓群の配置や、三重県松阪市



B群BⅠ周溝内埋葬人骨

1

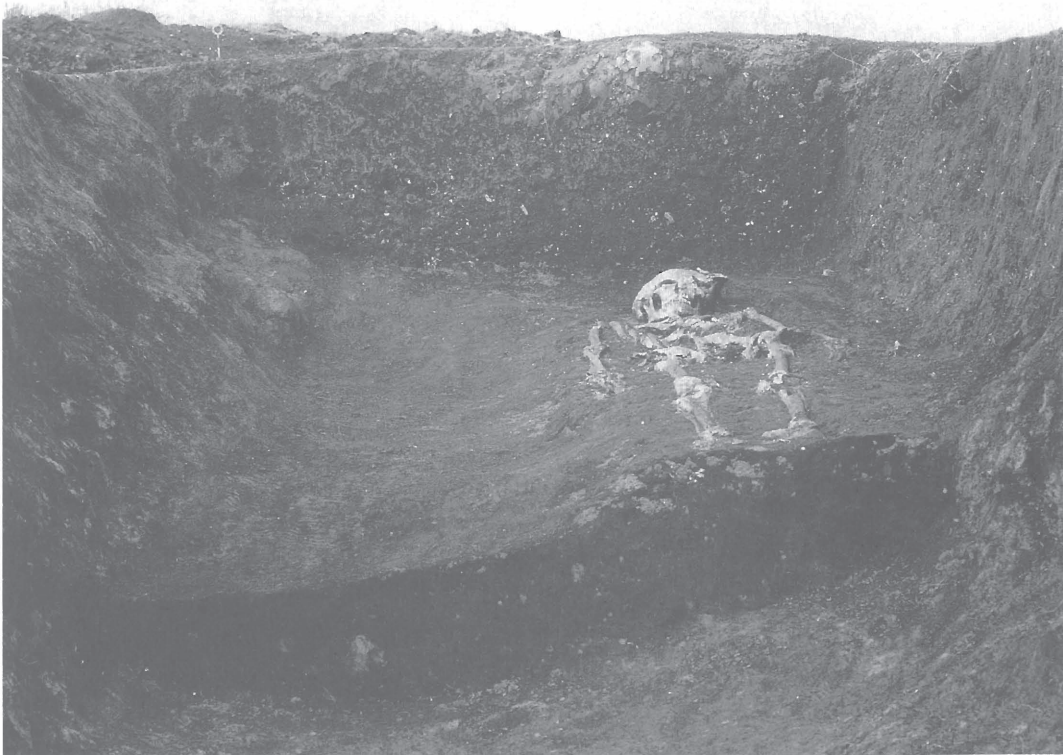
1 人骨全景 右壁は周溝外壁

2 手玉（管玉）装着状況

3 人骨出土層位 後方は混貝土層



2



（『千原台ニュータウン』Ⅲより一部改変して掲載）

3



4・5. 草刈貝塚千葉急行線予定地内 C 10周溝内土壇埋葬人骨 6. 同 C 9 周溝内土壇埋葬人骨
7. 松戸河原塚古墳墳頂主体部埋葬人骨

草山遺跡等の周溝を接して群在する古墳時代出現期の方墳群とも異なる。しかし、「主墳と小墳群とがいぜんとして一体となって同一墓域にある」(註9)点では共通の要素をもっているといえよう。この点で草刈の例は、集団の墓とは全く別の所に築かれた首長層の大型古墳に対し、より在地性の強い下位の小首長とその側近の人々の墓としてとらえられる。草刈の方墳群が造られた段階には、既に全国各地に大型前方後方墳が出現し、こうした小規模古墳との格差は一層大きくなっているが、その下にあって地域内で別の変遷をたどっていく小規模古墳群の構造に注目して、今後の調査の成果に期待したい。

一方、古墳時代出現期・前期の小規模方墳は、それぞれ規模に応じた墳丘をもっていたが、後世の削平を受けやすいため、中央部の内部施設が検出されていないものが大半を占めている。周溝内、あるいは周辺部の埋葬施設の調査は、墳丘を失った古墳の調査成果として重要な役割りを果たすといえよう。草刈の埋葬人骨は、周溝内に明確な土壌がない場合にも、掘り込みや土器群、玉類などの出土によって埋葬施設の存在を想定する必要があることを示してくれただけでなく、たとえ掘り込みや遺物が出なくても、周溝が埋葬空間として機能したことを教えてくれた。彼等は、千六百年に及ぶ眠りから醒めて多くを語りかけてくれたが、周溝が単なる区画ではなく、墓の一構成要素として強く認識されていることを改めて実証したといえよう。また、このような小規模古墳群の周溝内埋葬には、弥生時代の方形周溝墓の中央施設と周溝内土壌との関係に近い様相も見られ、群構成の特徴と共に弥生時代以来の伝統と新たな古墳時代の動向の両面から検討していく必要があろう。

註

1) 古墳時代出現期・前期の墳丘を失った小規模な方墳を「方形周溝墓」と呼称する立場もあるが、「方形周溝墓」とは、弥生時代社会に限定して使うべき用語で、弥生時代の集団の墓地の中から分離して一定地域内の集団の上に立つ首長墓が現われた古墳時代には、「方墳」の用語を用いるという立場に従っている。

古墳の時期区分についても諸説があるが、出現期・前期・中期・後期・終末期の五期区分法に立脚している。

古墳時代出現期の解釈は、市原市神門5・4号墳を出現期新段階に位置づけ、出土土器が畿内第5様式重式に並行するとされた田中新史氏の研究成果に基づいている。従って古墳時代前期は、畿内庄内段階～布留段階を通した期間にとらえ、ここで扱う方墳群は、前期の古段階に位置づけられるものと考えている。尚、この段階には、石川県七尾市国分尼塚古墳、長野県松本市弘法山古墳、栃木県小川町駒形大塚古墳等の大型前方後方墳が既に出現している。

2) ①『千原台ニュータウン』1(財)千葉県文化財センター 1980

②『千原台ニュータウン』II 一草刈遺跡A区・鶴牧古墳群・人形塚一 同上 1983

③『草刈遺跡』(財)市原市文化財センター 1985

④『千原台ニュータウン』III 一草刈貝塚一(財)千葉県文化財センター 1986

尚、第1図に示した草刈C区、D区、草刈貝塚の千葉急行線関連調査区については、現在整理中である。

3) 墳丘長16.0mで、前方部長が6.0mと前方部がかなり発達した形態で、後方部長との比は5:3に達している。後世の削平により墳丘だけでなく、周辺部も削られているようであり、頭初は前方部前面に溝が存在した可能性もある。尚、第1図の墳形は、切り合う住居跡の壁のラインを生かして、西側前方部の形を復元している。

4) 『佐倉市飯合作遺跡』(財)千葉県文化財センター 1978

尚、「飯合作」の名称は、字名の検討により「飯郷作」に調査担当者が訂正している。

- 5) 草刈D区は、今年度整理を開始したばかりであるが、A10については出土土器を実見して判断した。
- 6) 大場磐雄他 『松戸河原塚古墳』 1956
- 7) 『千葉県文化財センター年報』No.8 (財)千葉県文化財センター 1982
『千葉県の文化財』 同上 1987
また、図版5・6については、整理中である

- が、整理担当者の池田大助氏の御厚志により今回新たに掲載させていただいた。
- 8) A11の周溝内からも一対の合口壺棺が出土しているとの御教示を、調査担当者の一人である小高春雄氏から受けたが、まだ未確認である。
- 9) 都出比呂志「墓地の階層性」『岩波講座 日本考古学 4』一集落と祭祀一 岩波書店 1986

本文	報告書	文献	本文	報告書	文献
A 1	A区-99	註2-②	B 3	B区-139	註2-④
A 2	-94	//	B 4	-140	//
A 3	-100	//	B 5	-127	//
A 4	-98	//	B 6	-201	//
A 5	-93	//	B 7	-151	//
A 6	-103	//	C 1	-484	//
A 7	-101	//	C 2	-514	//
A 8	-102	//	C 3	-631	//
A 13	B区-137	註2-④	C 4	-659	//
A 14	-138 A	//	C 5	-513	//
A 15	A区-96	註2-②	C 6	-506	//
A 16	-95	//	C 7	草刈-27	註2-③
A 18	B区-136	註2-④	C 8	-24	//
B 1	-192	//	C 11	-26	//
B 2	-141	//			

表2 遺構番号対照表